

第4回例会報告要旨

Y Brasluniau o'r Papurau, y Pedwerydd Cyfarfod,
Tachwedd yr Unfed ar ddeg, 2006
Prifysgol Kinjo Gakuin, Nagoya, Siapan

第1部： 個別報告 Rhan 1: Papur

ウェールズと日本の宮廷文化にみる女性詩人

藤沢邦子

Women Poets in Welsh and Japanese Court Culture
Kuniko Fujisawa

要旨 Abstract

Within social and historic contexts, the Welsh and Japanese courts were the centres of cultural activity, poetry in particular, from 5th to 15th centuries. However, because of the Welsh and Japanese inclinations toward Oral/Aural and Visual (or reading/writing) cultures grew out of their respective language, popular taste and aesthetics, court cultures developed in different ways. Wales was a country of ear-minded 'oral literature': Japan of eye-minded 'written literature'. Under the constraints as private literature in the male-oriented society, the Welsh and Japanese female poets seem to have enjoyed making poems although no poems by Welsh women then survived because they did not write down their works unlike the Japanese counterparts who loved calligraphy. Yet, female poets in both countries not only must have demonstrated their literary gifts through either performing or writing, but also let others, mostly women, appreciate their works in the ages of court culture.

[keywords: women poets, court, oral vs. written literature]

日本では『万葉集』の昔から女性がさかんに詩を詠んだのに、詩がほとんど信仰であるようなウェールズで、宮廷文化の時代には、女性の作った詩がない。ケルトの強い女王、統治者との聖婚にかかわる女神、少年武者を鍛える魔女といった女性の存在感にもかかわらず、詩作はドルイドの昔から男性に独占された職能であり、また狩猟民族の戦士貴族社会では、宮廷詩の主要テーマが武勲と系図と治績を讃える男性的かつ政治的なものだったからと思われる。

とはいえ、口承文芸の国ウェールズでは、「聞き手」として詩歌を楽しんだのは男性に限られない。誰もが民謡的な詩になじみ、『ヘレーズの歌』のような女性を主人公とした叙事詩もあり、13世紀には恋愛詩や哀歌において女性の美

しさや美德が讃えられ始めた。救国ヒーローの予言詩には誰もが心躍らせたことだろう。これだけ詩に接していれば、詩想を得て、また楽しみとして詩作した女性はいたに違いない。ただ社会環境のせいでその数も聞かれる機会も少なく、書き記されないまま失われたのではないだろうか。

農耕民族の文人貴族社会だった日本では、日本語による詩のテーマは風雅で女性の詩作に向き、女性の文化活動にも鷹揚であった。漢字が伝来して以来、日本語は書字中心の言語に変わり、古来の口承文芸はサブカルチャー化し、宮廷では記載文学すなわち「読み書きする文化」が主流となった（口承文学は武士が力を持ちはじめた13世紀に、語りや説話文学として復活し、地方にも広まる）。宮廷は「詩文との調和の中に儒教的王道・善政をしく」とする文章経国思想にどっぷり浸かり、漢詩文が男性社会での公的な文学となった。中国古典に通じた詩作と達筆は宮廷人に不可欠で、いやが上にも「書く文化」あるいは「見る文化」が深まった。宮廷女性は表向きには政治や漢詩文とは無縁であったが、母語で私的文学とされた和歌を詠み、それを自ら書き記すことができた。

ここではウェールズと日本のこうした傾向を「聞く文化」と「見る文化」ととらえ、宮廷時代の女性詩人（アマチュア）について比較考察する。裏づけは『マビノギオン』や『源氏物語』といった文学および社会文化史に探りたい。

宮廷文化の時代とは6世紀から15世紀。ウェールズでは宮廷詩人タリエシンやアネイリンが活躍した時代、そしてローマ軍撤退後のアーサー王や12世紀の英雄的プリンス達を経て、グリンドゥールの反乱後にウェールズ伝統社会が消滅してゆくまでである。日本では大和朝廷において万葉歌人が活躍した頃から、ひらがなの発明で女流文学が花咲いた平安朝を経て、南北朝期に最後で21番目の勅撰和歌集が編纂された少し後までとする。

宮廷では、権力と富を象徴する儀式・酒宴・娯楽が繰り広げられた。ウェールズの詩人は職業的教育を経て宮廷に仕えたり、Bardic Orderの成員として各地を吟遊した。約1000年の宮廷文化時代のあいだ、覇権争いや他民族との攻防にもかかわらず、プリンス達の宮廷では詩歌や語りは健在だった。しかし15世紀になるとウェールズ伝統社会と宮廷詩人は姿を消し、ルネサンスの到来とともに女性詩人が登場する。作品が残っている最初の輝かしい女性は Gwelful Mechain (fl.1462-1500)であった。日本の男性歌人は本来アマチュアであり、勅撰集の撰者・编者あるいは歌論書著者は職業的な「官僚詩人」であったといえよう。やがて天皇の権力は衰えるが、宮廷はずっと文化の中心であり続けた。しかし南北朝期に文化の庇護と統制が宮廷から幕府に（すなわち貴族から武士に）移ると、男尊女卑の風潮のなかで女性詩人は存在感を失っていく。

『マビノギオン』では、男女ともに大広間で談笑し、詩や物語を聞いている。

しかし現実の宮廷では、12世紀頃からヨーロッパの宮廷には公私の別が生まれ、ウェールズでも *Laws of Court* に基づき、*strict-metre* による公的な詩を聞くのは男性に限られ、女性は私室に下がって女性向けレパートリーを聞き、音楽も大広間の妨げにならないよう控えめにと定められていた。これを傍証するような場面が、『ブリタニア列王史』や歴史小説 *Owen Glendower* (John C. Powys) に見られる。が、定型詩がトリクルダウンで女性に伝わったことは十分考えられる。耳から作詞法を覚え、創作した女性がいても不思議ではない。ただ、ノルマン化（次いでイングランド化）されていない女性の識字がやや遅かったこともあり、女性は自作が口頭で伝わることで満足していたようだ。

宮廷が失われると宮廷詩人は消えたが、「聞く文化」は消えたわけではない。新時代にはジェントリ階級のための職業詩人やジェントルマン詩人が生まれ、庶民の間では民衆詩人や語部がパブや家庭の暖炉のそばで口承文化を継承した。聞く文化はウェールズ語がリズム、韻、アクセントを基調とする音声中心の言語であることにも関係するだろう。ウェールズ語は音を神聖視した印欧語に属し、ギリシャ・ローマの雄弁術の影響も受けている。口承文芸への選好は、『マビノギオン』の筆録テキストでさえ、語ることを意識して、聞き手のための諸工夫があることから見てとれる。やがて写本を個人で黙読する習慣が生まれても、印刷がかなり普及しても、知識階級でさえ「ライブ体験や社会的きずな」を大切にしたいという。1600年ごろの文書は「休日の野外で、ハーブ奏者やクルース奏者は、祖先や聖人や予言者の行ないを語った。大変な数の老若男女がそれを聞いた」と伝える。口承は社会教育と公共の娯楽でもあったのだ。

「聞く文化」の根底には「話す文化」があると思われ、『ブリタニア列王史』では、アーサーがキケロばりの演説で諸侯を心服させ、『マビノギオン』には歓談のシーンが頻出する。アラウンの王妃やリアンノンも美貌だけでなく、楽しい会話の相手として魅力的だった。『老サワルフの歌』や『ヘレーズの歌』では、主人公が自らの愚かな言葉が悲劇を招いたと嘆く。話術と知性と人柄は一体であるかのようだ。さらに言えば、討論の詩、対話の詩、弁護の詩といった日本にはないジャンルがあり、「話す文化」の伝統が看取できる。

前述したように、『万葉集』には女性の作とされる歌が多数あり（一部は官僚詩人による代詠の可能性もある）、しかも皇族や女官に限られず、防人の妻や地方の遊女まで登場する。庶民女性の歌が都の宮廷主導の歌集に集録されていることは注目に値しよう。それは母系社会だった古代日本には、歌舞を捧げて神託を受ける巫女的な女王、故事来歴を伝える女性語部、鎮護国家のために写経する尼僧、天皇の祭祀の一端を担う齋宮・齋院がいたことと無縁ではなさそうだ。神聖な職務・特殊な技能・高い教養のゆえに彼女たちは尊重され、それが

女性一般の文化的優遇につながったのではないだろうか。「913年の歌合せでは、内親王が左右の男女混成チームのリーダーを務め、主催者は中宮で、講釈をしたのも女性。みな顔を見せ、声を聞かせている。11世紀になると講師は男性にかわり、女性は御簾の後ろに隠される。高貴な女性は顔を見せたり、声を聞かれるのははしなたいという認識が始まっていた」という。女性は表舞台から消えたが、女性詩人は消滅せず、『新古今集』その他の勅撰集を通じて足跡を残した。これは平安貴公子が「美しく書く女性」を評価したことと無縁ではなさそう。『源氏物語』の英訳者アーサー・ウェイリーは「平安朝の真の宗教は書道であった」と述べている。漢字という表意文字（線による絵）が書道という美術に発展しただけでなく、漢字の祖である「甲骨文字」が呪術性をもっていたことを考えれば、書字への信仰があっても不思議ではない。女性は流麗なひらがなで和歌を詠じ、物語世界で羽ばたき、日記で内省することができた。宮廷女房という読者かつライバルの存在もまた、書き手を刺激したことであろう。

歌合せはアイステツズヴォッドに似た詩歌のコンテストだが、音声の祭典ではなく、書画、調度品、金細工、漆芸、抄紙、きらびやかな衣装・・・目もあやな王朝絵巻だった。「聞く文化」と「見る文化」は、ウェールズと日本それぞれに社会、言語、国民の好みと審美観から生まれ、それが宮廷女性のありように影響したに違いない。『マビノギオン』のヒロイン達は話しぶりで、『源氏物語』のヒロイン達は書きぶりで、知性や感受性や人品を発揮しているのは、そうした文化伝統に根ざしたものである。